

カラース

3話「夜のお仕事」

「で、どこを走っているのかな？」

木々のすきまから車窓から流れるように過ぎていく街の夜景が見える。車の運転席には赤い服を着た少女、助手席には青い服を着た少女、僕は後部座席にいて前の二人に語りかけた。

「えー、なーに、風で聞こえなーい」

「だーかーら、どこに向かって走ってるの！ って言ってるんだけど」

「どこに？ そんなの言うわけないじゃない」

砂利道をかなりのスピードで走っているの、車は揺れに揺れ、窓が全開になっているので、風の音がひどく会話は自然と大声になる。

「なんで、教えてくれてもいいじゃん」

「だーめ、シアンにはおーしえない」

ぐっ、このいつもいつも僕をのけ者にして。そんな怒りが脳を巡るのだが、それは言葉にならない。というかできない。だって、運転しているこの赤い少女が”怖い”んだもの。

「さて、この辺から歩いていきましょう」

車が停まって、運転席から赤い服を着た少女——アカが車を降りる。

そして、運転技術はあるのだろうけど、ひどい道だったことと、スピードが速すぎたことが災いして、夜の冷たい風にさらされたにも関わらず、天地がひっくり返るくらいに千鳥足になったしまった僕も車から降りた。

「うふ、気持ち悪い」

「なに？あれくらいで酔ったの？シアン、車弱ーい」

いや、誰だってあんなの酔うって。

「こっち」

全く酔っていない足取りで、助手席から降りた青い服を着た少女——アオが平然とした口調で林道を指差した。

「アオ、全然酔ってないの？」

「慣れた」

アオの口調は単調で、単語的。いつも、一言で終わる。

「シアンがだらしないのー」

「こんな車種もわからないような古い車で、酔わないほうがおかしいよ」

「ひどーい、この車全然古くないよ。買ったの今年だし、一応新車だったし」

いや、絶対新車の訳ないよ。こんなにくすんだ色の車なんて。

「早く行こ」

「むー、ねえ、アオ。このシアンの小生意気な口を封じてから仕事にしない」

「く、口を封じるって！？」

「ダメ、仕事優先」

「うー、くやしいな。帰りに屋根の上に吊るして、〇ン〇ン丸出しにしてやろうかと思
ったのにー」

〇ン〇ンなんて、女の子が言ってはいけません。

「・・・遠いけどおしゃべりは止める」

アオが仕事モードに入る。

「あ、ごめん」

「はい、アオ、まじめー。じゃ、今日の役割分担を話します」

こうして、どうやって来たのかも、どこに来たのかも、なにをしに来たのかもわからな
いまま、作戦会議が始まった。

「私は——時間になったらドアから突貫。アオはその間に裏口から目的の物を奪取し
ます」

「目的の物って？」

「もー、シアン邪魔、口出ししないで」

「いや、だって僕だって聞く権利ぐらいあるだろう？」

「ないよ、そんなの」

ひ、ひどい。

「アカ、それくらいは教えてあげて」

「もう、仕方ないなー、目的の物はー『金庫』です」

き、金庫？

「ねえ、それってあの家の金庫ってこと？」

「うん、そーだよ」

「あの家って、何か悪い事してたりするの？」

「うん？　・・・アオ、どうなの？」

「知らない」

「ちょ、ちょっと待ってよ。それじゃただの強盗？」

悪じゃん、僕たち悪党じゃん。

「強盗とは人聞き悪いわね。そーだな、・・・臨時徴収？　だよ」

「だー、言葉を変えても人聞き悪い」

それに語尾の「？」はなんだ。

「ダメ、絶対ダメ。そういうことは絶対しちゃダメ」

「えー、なんでー。軍資金でそうやって調達するものでしょう？」

「軍資金はそうかもしれないけど、これはただの強盗。悪だよ、悪」

「もう、うっさいな。だから、置いていけばいいって言ったのに」

「嘘。逃げられると面倒だから、いっしょに来たってアカ言った」

「あれ、えっと、そーだっけ？」

「僕に聞かないでよ」

二人で話したことでしょ。

「でも、仕事中に逃げられる可能性の方が大きい。アカ、失敗」

あ、そうか、機会を見れば逃げられるんだ。

「ふふん、その辺はこの私の脳みそちゃんが折り込み済みよ。ただでさえ土地勘のない場所から、さらに離れた場所、しかも夜に、この意気地なしシアンが一人で夜道を逃げれるわけじゃない。逃げたとしても、ビービー泣きながら私たちに助けてもらうのが関の山よ」

えっへんと胸を張る赤い服の少女。ふくよかでないその胸がちょっと悲しい。

「なっ、アカ。それはちょっとひどい言い様じゃないか。僕は、そんなに・・・」

「そんなに？ なーによ？」

「・・・そんなに、臆病じゃない」

「クスクス。臆病じゃない？ へー、臆病じゃないんだ。そんな人が夜、一人でトイレに行けなくて、ビンにおしっこしたりする？」

この上ない魔的な笑顔を浮かべるアカに対して、僕は血の気が引いていくような気持ちだった。

「な、なんでそれを知ってるの!？」

「だって、シアンの部屋って廊下から音が駄々漏れなんだもん、ちょろちょろって変な音するから、鍵穴から覗いてみたら、くっくっくっ、驚いたねー、私は」

「本当、なの？」

アオはアオですごい冷淡な目で（それがいつものアオと言えばアオなんだけど）こっちを見ている。

「嘘だって、そんなのアカの嘘。僕がそんなこと、するはず・・・ないじゃない？」

「くっくっくっ、語尾がうわずってやんの」

「う、うるさいな。ちょっと、舌嚙んだだけだろ」

「ま、そういうことにしときましょう。クスクスクス」

本当はトイレに行くのが怖かったとかじゃなくて、ただ単純にこのビンの中におしっこしたらどうだろうなんて興味でやってしまったのだが、それを理由にするのは怖くてトイレにいけなかったより恥ずかしい。

「じゃ、認めなさいよ」

「えっ？」

「臆病だって、認めなさいよ」

「うー・・・」

変態よりも怖がりの方がまだ幾分かましだという理由で、僕は肯いた。

「ええ、ええ、そうだよ、そうですよ、そうでしょうとも、確かにこんな暗がりでも、しかも見知らぬ土地で歩き回るような度胸は僕にはないよ」

「はい、よくできましたー。ねー、アオ、こんなおっかんがりが私たちの行動にとやかく言うなんて100年早いよねー」

「それとこれとは別」

「もう、この、この」

とアオのほほをつつくアカ。僕は、このまま話がそっちに流れてくれることを祈るだけだ。

「じゃ、シアンはここで車を見張ってる。ここからなら、家も車も一望できるから、万

が一、私たちが逃走経路を見失ったらそれを誘導すること。いーい？」

車からしばらく歩いた森の中で、アカが言った。

「わかった。でも、なるべく怪我とかしないようにね」

「バッカじゃないの。戦闘要員でもない連中に、私たちが怪我なんてさせられるわけないじゃん」

それもそうか、パーティーであんな屈強な黒服相手にぜんぜん勝ってたもんな。

「じゃあ、なるべく相手も怪我させない。いいね」

「えっ、相手も？」

「そう、相手も、アカの実力ならそれくらいできるだろ？ 怪我させずに気を失わせるとか」

「うーん、私の場合、ナイフだからなー、そういうのはちょっと難しいかなー」

「じゃあ、アオと役目を交代するんだ。それなら、相手に怪我させずにすむだろう？」

「それは無理」

「なんでさ？」

「あのね、目的はここの金庫だよ。見たことないけど、すごく重いでしょう？ か弱い私に持てるわけないじゃん」

「それもそうか」

か弱いかどうかは別だが。

「と、言うわけでー。腕の一本ぐらいで勘弁すると言う方向で」

「だー、ダメだって、そんなのダメ。腕も足もどこも怪我させちゃダメ」

「えー、めんどくさーい」

「僕をマスターにしたいんだったら、そういうのは一切禁止だ」

その言葉に、アカとアオが異様に反応する。

「「マスターになってくれるの？」」

同調和音でそんな言葉が発せられる。

「いや、そういうわけじゃないけど、マスターにしたいなら、そういうことは禁止って

意味で・・・」

第一、マスターがどんなのかの説明もまだないわけだし。

「でも、シアンに自覚が生まれたって訳だ。ともかく第一歩だね」

「ん」

アカとアオは互いに片手を挙げて、音が鳴らないようにハイタッチをした。

「確認。アカが玄関から突入後、頃合いを見計らって、私が裏から侵入。金庫を発見

後、それを持って、ここまで移動。その後、合図を出してアカも離脱。各自、車まで移動

してミッション終了」

「ま、合図がある前にみんなやっちゃってるかもしれないけどねー」

そんな風アカが笑って応えるので、ちょっときつい目で見たら――

目をパチクリさせた後、軽く微笑んでこっちに軽くウインクなんてしてきた。ちょっ

と、ドキドキした。

「うし、じゃあ、頑張ろう」

「了解」

そういと二人はそれぞれの担当の場所へ移動した。僕は、これで泥棒の片棒を担ぐのかとげんがりしながらそれを見守った。

「たのもー」

深夜の正門に不協和な女の子の大きな声が響いた。

その家は、大きな敷地で、塀に囲まれていて、見るからに金持ちって感じのお屋敷だった。それが村外れに、一軒ぽつんと立っているのだから豪儀なものだと思った。

「たーのもー」

もう一度、長く間延びのした大きな声その屋敷一体に響いた。それで、ようやく「なんだ」と、正門から5mくらいある玄関から、男の声がした。

「あー、人がいてよかったー。すいません、道に迷ってしまっー」

それは明らかに不審すぎた。深夜に、年頃の女の子が一人、こんな場所で迷子になるとなんて、不審としか言いようがない。

けど、アカの仕事は陽動だ。だから、相手がアカの方に集中すれば集中するほど都合なのだから、これでいいのだろう。いいのか？

「その坂を下っていけば街がある。そこまで行けば夜中でも誰かいるだろ」

男はそう言うと、玄関の戸を閉めようとする。

「ねー、ちょっとちょっと待ってよー」

「なんだ」

「それだけー？ こんな夜中に、こーんなかわいい娘が、道を訪ねてきてるってのに」

一」

かわいって、自分で言うなよ・・・

「・・・・・・・・」

ボタン。男は無言のまま、ドアを閉めた。

「むっかー、かんっぜんにシカトじゃない。ほんとに男なの、チ○ポコついてんのか

一」

それでも、中からの反応は皆無だった。

「あっそう、そうなんだ、そうきますか・・・」

アカは鉄格子のような正門を掴むと、思い切り、全力で前後にそれを揺すり始めた。

「こらー、でてこーい」

ガチャガチャというかわいらしい音ではなく、ガッチャンガッチャンと正門が壊れるような激しい音がする。

・・・・・・・・

それでも中からは何も反応がなかった。

さっき玄関から出てきた男の人は、見るからに堅気の風体をしていなかった。そう、この前アカたちと戦った黒服のような印象だ。

大きなお屋敷だとは思ったけど、ここはそういう人たちの拠点なのだろう。それなら、ここから金品を強奪してもいいかもしれない。そう頭をよぎった。

「でも、ちょっと待てよ。もし、そんなところだとしたら、家の中には堅気じゃない人がいっぱいいるんじゃないだろうか？」

「おら一、でてこーい。で・て・こ・ー・い」

相変わらず、アカは門を揺すっているが、中からは何の反応もなく、門自体もびくともしなかった。

「はあ、はあ、はあ、はあ、・・・もう切れた」

急に止まったアカが門の前で俯いている。もう諦めたのだろうかと思った瞬間、光るものが、玄関の灯火に反射して、一瞬キラリと。

激しい金属音が一瞬だけ響いた。そして、門を閉じていた鉄の鍵が真っ二つに両断されていた。

ガシャン。アカが足を前に突き出すと、鉄格子のような正門は完全に開け放たれた。

「おら一、これで出てこないわけにはいかなかっただろー、でてこーい」

「・・・・・・・・」

一間の静寂の後、さっきの男を先頭にして、三人の男たちが出てきた。

「お前、一体何者だ？　ここがファローネ一家のアジトだと知っていてやっているのか？」

「ファローネ？　そんなの知らない。私はね、ただこないたいけな女の子が夜中に訪ねてきてるっていうのに、事情も聞かないで追い返すその態度が気に入らないの」

「アニキ、この女拉致っちまいませうぜ」

男の脇にいる舎弟と思われる男が、すごみながら囁いた。さすが、田舎マフィアだ。後先考えず言う事が暴力的。

「お前はバカか。拉致して行方不明になったら、この女の知り合いが捜索願いだのなん

だの出して、ここを突き止められたらどうする気だ」

「へ、へい。すいやせん」

ふーん、警察にここを捜されたら困るってことかな？ その割にはファローネ一家だつて、簡単に名乗ったし、偉そうにしているけどあの兄貴分の男もあんまり賢くないのかもしれない。

「おい、女。今だったら見逃してやる。さっさと何処かへ失せろ」

兄貴分の男が、アカに凄みを利かせて脅す。

「そんなこと言わないでください。私、道に迷って、お腹も空いて、もう一歩も動けないんですー」

・・・そんなヤツがキレて門なんか壊さないって。

アカは身をくねらせて、弱々しい女の子を演じている——らしい。

「アニキ、やっぱ拉致りましょうぜ。この女、多分ここに来ることなんて誰にも言ってやしませんぜ」

男は下卑た笑いをしながらそう言った。笑いの奥には、男が女を値踏みするような、そんな不快な感情があった。

「ほら、アニキだって最近ご無沙汰でしょう」

目上の人間にこびるような笑い。

「ふむ、そうだな」

そして、兄貴分の男は先程の冷静さを装うことなく、アカの全身を上から下へと眺め始めた。

アカはその三人の視線を浴びてもひるむことなく、笑みを浮かべている。この辺の胆力
はさすがに大したものだと感心する。

「おい」

兄貴分の男が二人に合図する。二人の男は待ってましたと言わんばかりに、アカの方に
駆け寄って――

「ひゃああああー」

と悲鳴をあげた。

「手が、手がー」

鮮血が門よりも高く吹き飛ぶ。

「クス。この私をどうしようって言うのかしら」

「う、うわああああ」

悲鳴をあげなかった方の男が、腰砕けになって逃げようとする。が、その背中にナイフ
が突如として現れる。

「逃がすわけないでしょ」

「お、お前一体!？」

兄貴分の男はまだ状況を理解していないのか、狼狽するばかりで、アカが差し込まれた
ナイフを抜くのを黙ったまま見ていた。

「あーあ、シアンとの約束守って、殺さないでいてあげようかと思ってたんだけど、こ
んな事されちゃあね」

アカがチラとこちらを伺ったのがわかったが、それを認識した時には、アカは次の行動

にかかっていた。

男が上着の内ポケットに手を伸ばす。暴力に疎い僕でもわかる。彼は拳銃を抜こうとしている。が、手は上着の中に差し込まれた状態から動く事はなかった。

「あ、ああああー」

腕の筋のところに、一筋の金属が刺さっている。それは筋の隙間と隙間を縫うように、綺麗に、端麗に、美しく刺さっていた。

「もう、おじさまったら、そんな無粋なもの出さないで」

そして、アカはナイフを抜くと同時に、掌打を相手の顎に当てる。

それで、男が意識を失い、崩れ落ちていく様が、僕のところからでもよくわかった。

「どうした？」

「何があった？」

中の連中も外の様子に気付いたらしい。中からぞろぞろと男たちが出てきた。

「アニキ。し、死んでます」

「お前がやったのか？」

男がそう凄んだが、アカは平然と無言のままだった。

男たちは自分たちが襲撃されていることを把握し始めたのか、無言のまま次々と拳銃を取り出し、アカに照準を定める。アカは、その行動の前に、門のところまで退き、門を盾にするように構えていた。

キン、キィ——ンと、門に兆弾する火花が、ここからでも見える。アカは狙いを定められぬよう、目に見えぬような速さで弾をかわしている。

それは傍から見ていれば、当たることのない弾がただ飛び交っているように見えるが、実弾を門という盾があるとはいえ、かわし続ける事は不可能だ。しかも、相手は複数人、アカに弾が当たるのは時間の問題のように思える。

とその時、ドオオオオンという号砲が裏の方から聞こえてきた。

「ち、今度はなんだ」

「す、すいません。裏の方からも誰か忍び込んだみたいで」

相手が混乱しているのがわかる。たった二人の少女に、いくにんもの大人が、狼狽し、何の抵抗もできないままにいる。これはあの時の再現のようだ。

「あーら、もうお終いなんだ。アオったら仕事速いんだから」

アカはそう言うと、門を盾にしたままこちらへ駆け出そうとした。

「！」

それは、玄関の方からでなく、アカの横から、飛んできた。初弾が当たらなかったのは運が良かったからかもしれない。アカが見たその先には、おそらく回りこんできただろう男が拳銃を携えて立っていた。

「あーら、少しは頭を使ってるやつもいたのねー」

「くらえ」

初弾は駆けつけて慌てて放ったので外れたのだろう。今度はしっかりと銃身を固定してアカに狙いを定めている。だから、それはアカに当たるのだろうと思った――。

「しっ――！！」

金属と金属が弾けあう音が聞こえた。僕はありえない状景を見た。人が飛んでくる弾

を、一本の、それこそキャンプで包丁代わりに使うようなナイフで、弾いたのだ。

「な、な・・・」

撃った男は何が起こったのか理解できていないようだった。それは当たり前だろう、遠くから客観的に見ている僕も理解できていないのだ。

「素人なら銃は必ず二発放ってって習わなかった？」

アカはそう言うと、手に持っていたナイフを水平に投げた。

サクッというような擬音が脳の中で聞こえ、男の首筋にナイフが刺さった。そして、鮮血が飛ぶ瞬間には、アカがそのナイフを抜いていた。

「はい、お終ーい」

「く、くそ、撃て、撃てー」

男たちはその光景を見て、近付かぬように再び物量作戦に出る。しかし、次々に撃たれる弾の合間を縫って、アカは飛ぶように林の中に消えていった。

「シアン、何をしてる？ 何もやってない人が最後まで残っても意味ない」

声の先には身の丈にそわない大きな金庫をしょったアオが立っていた。

「ご、剛力伝」

「ん？」

「・・・えっと、ごめん、ボウっとしてた」

「とにかく逃げる」

「ああ、そうだね」

あいつらはアカを追っているだろうけど、こっちに来るかもしれない。とりあえず、僕たちは車まで移動することにした。

「うん、しょっと」とアオが後部座席に金庫を下ろす。それだけで車が少し傾くほどの重量なのに、アオがもっていると大きいだけで重そうじゃないから驚きだ。

「アカ、大丈夫かな？」

「大丈夫、それほど本格的な連中じゃなかった」

「アオも戦ったの？」

「二、三人。不意打ちだったからほとんど戦ってない」

「そう、でも銃なんて持ってるような連中だとは思わなかったよ」

「ん、そうだね、そこはちょっと予定外」

「やっぱり、ここの連中のこと二人は知ってたの？」

「なにが？」

「だって、あいつらマフィアでしょ？」

「・・・多分ってくらい」

「多分て？」

「いつも、だいたいこういう奴らのところ行くから」

「ここって、自分たちで探してきたんじゃないの？」

「・・・それは、秘密。マスターになってくれたら教える」

「あ、そう」

それで話はお終い。辺りは静寂に包まれて、運転席は主の帰りを待ちわびていた。

「はい、お待たせー」

そんな空気を一切読まず、その場にそぐわない間の抜けた声が聞こえた。

「ん、じゃあ行く」

「ねえ、あいつらどうしたの？」

辺りは静寂のまま、あいつらが追いかけてきているなら、銃声とかが聞こえてきても不思議じゃない。

「うん？ あーあいつらね。面倒臭いから撃退しちゃった。てへ☆」

てへ☆ じゃないだろ。

「まさか、殺してないだろうな」

「あー、シアンあんな連中のこと気にしてるのー！？ あいつら、私を視姦したんだよー」

「視、視姦っていうのはちょっと言い過ぎじゃないか？」

「ふーんだ、シアンもあいつらの肩持つんだー。ちょっとショック」

バタンと、運転席に乗り込んだアカがドアを勢いよく閉める。

「男なんてそんなもの」

アオがボソッと呟いた。

「あ、あのなー、そりゃあ、あいつらのアカに対する態度は気に入らなかったけど、殺すことはないんじゃないかって思ったんだよ。僕は」

「ふーん、シアンもあいつら気に入らなかったんだ」

アカが既にエンジンのかかった車をふかし始める。

「え？ まあ、ちょっと気に入らなかったけど・・・」

「じゃあ、生意気な事言ったのは許してあげる。さあ、もう帰ろ」

な、生意気って・・・

激しいエンジン音がして、車が動き始める。新品だと言っていたこの車はやはり中古なのだろう。そして、車は金庫の重量のせい動きが若干安定していたようだが、やっぱり僕は酔った。

——後日。

「ねえ、あの金庫って中身どれくらいあったの」

「あー、シアンも普段は悪いことしちゃダメ。とか言っというて、そういうのは興味あるんだー」

「いや、だってさ、当面の生活費とかになるんだろ、あれ？ 少しは興味湧くじゃない」

「あれはまだ開けてない。オレンジが着てから」

「オレンジ？」

「ああ、私たちの仲間の名前。ちなみに、コードネーム」

「まあ、そりゃそうだろうな」

そんなへんてこな名前、実名だったらイヤだ。

「じゃあ、二人は開けられないの？ あれ」

「まあ、やってやれない事はないけどー」

「じゃあ、開けてみようよ。せっかくだし」

——で、カチャカチャ。チン。

「開いた」

「お、どれ、どれ、金庫の中身はなんじゃろな」

「どれどれ、早く見せてよ」

「うん、あった」

アオが金庫から取り出したのは、札束の山ではなく——

「何これ？」

東洋だかなんだかの木像。いや、仏像と呼ばれる物か、金庫の中にはそれがたった一つ、ポツンと置かれていた。

「ちょっとー、これってなんなのよー」

「そ、そんなの僕に言われても知らないよ」

「むー、うきー、もう生活費が底を尽きるっていうのにー」

「えっ、もうお金ないの」

「あと、ちょっとしかない」

「ええー、これからどうすんのさ」

「シーアーン」

「な、なんだよ。そんな目してさ」

「シアンが街で働いて来なさい」

「・・・あ、あのなあ。僕は人質なんだろ？ 人質が生活費を捻出するなんて聞いたことないよ」

「いいから、行ってきなさい」

アカがビシッと、玄関を指差す。

「無理。僕、仕事とかしたことないもの」

「ウエイトレスでもなんでも、簡単な仕事があるでしょうがっ！」

「そういうのは、アカたちがやればいじゃんか」

この二人なら、さぞ男の客で賑わうだろう。

「いーい？ シアン。世の中にはね、普通とは趣の異なった人がたくさんいるのよ。そして、そういう人の方が金払いがいいの」

「ちょっと待って、ウエイトレスって、Yシャツにズボンじゃなくて・・・」

「うふふ。シアンの背丈なら、まだ着れる服があるから♪」

「シアン。これ」

後を振り向くと、ウエイトレスというよりメイドさんと言った方がいいようなフリフリのついた服をアオが持っていた。

「うわああああ、絶対いやだー」

「くおら、逃がすかっ」

背後からアカが僕を羽交い絞めにする。

「シアン、着替える」

アオが一步にじり寄る。

「な、なんで二人ともこんなに手際がいいのさっ」

「あ、それはアオに聞いて」

「・・・お金に関係なく、着せてみたかった」

それ、ただのアオの趣味じゃん！！

「——というわけで、逃げらんないわよー。覚悟しなさい」

「ひい、いいやあああ。おたすけー」

なんとか、その格好でバイトに出るようなことは回避できたんだけど、それでも強引に着替えさせられた。

それで、アカは大爆笑。アオはしげしげと見つめて（当人曰く、見惚れて）。着替えたことも屈辱だし、着替えさせられたことも屈辱だし、最後の方は涙目で懇願していたと思う（忘れたいので、もう記憶にない）。そうして、僕は一生癒せない心の傷を負ったのだった。

あとがき

閑話です。なんかちょっと戦闘を入れたかったのです。ただ、それだけの回です。

でも、次の方がバトルだぜ、強敵現れるだぜ。と予告して、今回は幕。